

この世界から消える前に、  
君の声が聞きたかった

ユニモン Yunimon



アルファポリス文庫

目次

春の嵐

秘密

泣き笑い

梅雨晴れ

手紙

夜の逃避行

君の欠片<sub>かけら</sub>

初恋

7

51

91

113

123

147

175

211

拝啓  
げんきに  
して  
ますか？

春の嵐

「ねえ、僕のために歌ってくれない？」

無邪気な笑みを浮かべ、その声をかけてきた目の前の男子を、私はポカンとして見返した。

彼は私の机に手をついているし、思い切り目も合ってるけど、たぶん聞き間違いだろう。

ていうか、あり得ない。

聞き間違いって思いたい。

無視してうつむくと、彼が下から私の顔を覗き込んできた。真つすくな茶色い瞳から本気が伝わってきて、背筋がヒヤリとする。

「聞いている？ 白浜風しらはまなみさん。僕、ギター弾けるようになったからさ、歌ってほしいんだ。それを動画サイトにアップして、有名人になりたい」

高三の始業式から二日経った朝の教室は、生徒たちの話し声で騒がしい。

洗いたてのワイシャツの匂いに似た爽快感の中に漂う、そこはかとないうる緊張感。

新学期特有の空気の中、私は彼を、信じられないものを見る目でまじまじと観察した。

薄茶色の柔らかな髪に、猫っぽい目元、八重歯が覗く唇。

幼い印象を受ける顔だけど、身長はそこそこだし、見た目は整っている。

名前は知らないけど、なんかいつもニコニコして目立ってる、前からたまに見る男子——彼は私の中で、そういう立ち位置の人だった。

「あ、ごめん。僕の名前知らないよね？ 三日前から同じクラスになった、戸張響とばりきょうっていうんだけど」

にへら、とどこまでも屈託くつたくのない笑い方をして、戸張は続けた。

私はたしかに、彼の名前を知らなかった。

だけど返事に困っているのは、話したことのないクラスメイトが突然話しかけてきたからっていうわけじゃない。

「あ、もしかして、僕みたいな奴が動画サイト扱えるかって心配？ 大丈夫、そういう分野なら玲二れいじが得意だから、どうにかしてもらおうよ」

彼は私の反応をどう勘違いしたのか、まったく見当はずれのフォローをしてくる。

「おい響、お前何やってんだよ！ そして勝手に俺を巻き込むな！」

慌てた様子で戸張の肩に手をかけてきた黒髪の彼は、どうやらたまった今話に出てきた玲二のようだ。

「お前、知らないのかよ？ 白浜さん、喋れないんだよ。ほら、先生と話すときも、いつも筆談してるだろ？」

玲二が戸張の耳元でヒソヒソと囁いた。

私はようやくホッと胸を撫で下ろす。

私が喋れないことは、学年中が知っていると思っていたけど、なぜか戸張は知らなかったらしい。だけど知ったからには、焦ってすぐ私の前から立ち去るだろう。

喋れない人間に『歌え』なんて、デリカシーがないにもほどがある。

いろいろな意味で完全にアウトだ。

……と、思ったのに。

彼は焦るどころか、表情ひとつ変えなかった。

「知ってるよ、玲二。でもさ、もう白浜さんしかいないんだよ。クラス中の奴に断られたから」

「おい！ いくらお前でも、言っていないことと悪いことがあるだろ？ 白浜さんにそんなこと言うのは、どう考えても失礼だ」

うん、そう。本当にそう思う。

玲二とやらが常識人でよかった。

だけど目の前の非常識人は、それでも引き下がる様子がない。

「ねえ、白浜さん。もう授業始まっちゃうから行くけど、考えておいて」

最後にとびきりの笑顔を見せると、戸張は玲二に引きずられるようにして私の前からいなくなった。

自分の席に戻った戸張の周りに、あつという間にクラスの女子たちが集まってくる。

「何やってんのよー」

「ああいうの、ほんと信じられない」

どの女子もスカートが短めで、同じような黒髪ロング。

新学期早々あつという間に編成された、クラスの女子のカーストトップ集団だった。そんなトップ女子たちに早くも慕われている戸張は、やっぱり私とは別次元の人間だと再認識する。

「そう？ 僕は、悔いのないように生きてるだけだけど」

「戸張が偉人みたいなこと言ってる」

「戸張、偉人だったの？」

ギャハハ、という女子たちの笑い声が響く。

「あ、戸張。いたいた！」

すると、教室の入り口からそんな声が出た。弾むような足取りで戸張の方に近づいてきたのは、他クラスの女子ふたりだった。

「美奈が戸張に会いたって言うから来ちゃった。美奈、戸張とクラス分かれてすぐがっかりしてるんだよ」

「ちよっと！ 戸張とクラス離れたねって言っただけでしょ!? がっかりはしてないから！」

美奈と呼ばれたポニーテールの女子が慌てている。

「おー久しぶり、元氣？」

戸張は乙女の複雑な心理に気づく様子もなく、呑気に笑いかけていた。美奈ちゃんは顔を赤らめつつも「うん、元氣」とほんの少しうれしそうにしている。

「戸張は相変わらずバカそう」

「バカそうじゃなくて、れっきとしたバカなんだよ、コイツ。さっきもさー……」

玲二が声をひそめ、他クラスの女子たちが驚いたように私に視線を向けた。

さっき、戸張が私に声をかけたことを話しているんだろう。

何をするでもなく無表情で座っている私を見て、彼女たちがそそくさと目を逸らす。関わりたくない、と思っているのが丸分かりだ。

まるでこの教室の光と影——戸張と私は、そんな逆の立場にいる。

戸張を取り巻く賑やかな声は、同じ教室の中だというのに、はるか遠い世界から聞こえるみたいだった。

さっきのはなんだったんだろう？

なんであんな人が、私なんかに話しかけてきたんだろう？

あの人、本当にバカなんだろうか？

喋れないから歌えない——そんな当たり前のことが、理解できないの？

それとも、こんなこと白浜風に言える自分はすごいだろうって、周りにアピールしたいとか？

なんにせよ、私が一番嫌いなタイプの人間なのはたしかだ。

いつもは教室の備品みたいに存在を忘れられているのに、戸張が話しかけてきたせいで、変に注目を浴びてしまったし。

うんざりしながら、私はスカートのポケットから小さなノートを取り出した。パラリと捲ると、昨日の夜、祖母に見せた走り書きが目飛び込んでくる。

【明日からは通常授業だから、お弁当用意しなくて大丈夫だよ】

その隣に、忘れないようにと書き留めた。

【戸張響は、頭のネジが足りていない】  
 コミュニケーション手段としていつも持ち歩いているこのノートは、ときにメモ代わりにもなっていて、とても便利なのである。

声が出なくなったのは、中三の秋だった。  
 きっかけは、父の失踪だ。

小四の頃に母を亡くしてから、私は父とふたりで暮らしてきた。男手ひとつで私を育ててくれた父は、ズボラで頼りないところもあつたけど優しい人だった。

だけどある日、そんな父が帰ってこなくなった。ダイニングテーブルの上には、私の教育費が入った通帳と書き置きが残されていた。

父には結婚を考えている恋人がいるけど、彼女が私と暮らしたがいなかったため、出ていくことにしようだ。

手紙を読んでいるとき、私は意外と平気だった。

ふうん、と頭の中で漠然と思っただけ。

その後、私は近くに住む母方の祖母の家で暮らし始めた。

気ままに年金暮らしをしていた七十代の祖母は、年のわりに元気でアグレッシブな

人で、父のことを根掘り葉掘り聞くことなく私を受け入れてくれた。私の気持ちを慮おもてがってくれたのか、生活が激変したにもかかわらず、祖母からは苦言ひとつなかった。

それからの暮らしは、意外にも穏やかだった。

それなのに、突然声が出なくなった。

病名は、心因性失声症。

平気だと思っていたけど、実際はストレスを感じていたらしい。

医師が言うには、心因性失声症は突発的なもので、声帯の機能に異常があるわけではないから、時間が経てば治る場合が多いとのこと。

声の出せなくなった私は、この病気が治るまでのコミュニケーションツールとして、ノートとペンをいつも持ち歩くようになった。

人と会話しなきゃいけないときは、筆談で済ませばどうにかなる。

そんな変わり者の私を、同級生はまるで腫れ物に触るように扱った。

同じクラスにいるのに、ひとりだけ透明な壁を隔てた別の世界にいるみたいな学校生活。

だから、戸張があっつけらかんと壁をぶち破り、話しかけてきたときには本当に驚いた。

「ああいう分をわきまえない変人も、世の中にはいるらしい。」

放課後。

昇降口で上靴からローファーに履き替え、外に出た私は、ピロティの柱にもたれるようにしてこちらを見ている人物に気づく。

「ひよろりとした体型に、茶色い頭。」

変人、戸張だった。

「やあ」

目が合うなり、彼が私に笑いかけてきた。

嫌な予感しかなかったから、私は見て見ぬフリをして前を横切ろうとした。

「ただ戸張は、飄々とした足取りで私についてくる。」

「さっきの話、考えてくれた？ 僕のギターに合わせて歌ってよ、白浜さん」

「どうやら、また朝の話を蒸し返すつもりらしい。」

想像以上に頭のネジが緩いようだ。

私は立ち止まると、ポケットからノートとペンを取り出した。いつもより筆圧強めに文字を書く。

【「正気ですか？」】

「ん？ まさきって何？」

あ、この人、本物のバカなんだ。

目の前の彼に、気の毒な視線を向ける。

「お、やっとこち見てくれた」

「ただ彼は、よりいっそうニコニコと笑みを深めた。想像以上に残念な人のようだ。」

【「私、声が出せないんです」】

「うん、知ってる」

【「声が出せないから歌えないんです」】

「普通はそうだよ。でも」

ノートから顔を上げた戸張が、キラキラとした光が見えそうな無邪気な目をする。

「字がきれいだからきくと声もきれいだよ、白浜さん」

口説き文句のような軽いセリフ。

「……！」

しらじらしいにもほどがあつて、私のイライラは頂点に達する。

まるで話にならない。

私はノートポケットにねじ込み、戸張から逃げるように校庭をズンズン進んだ。それでも戸張はしつこく私を追いかけてくる。

「ねえねえ、待ってってば！ おーい、白浜さーん」

戸張がやたらと騒ぎ立てるものだから、下校中の生徒たちがちらちらとこちらを見てくる。中には耳打ちし合っている女子たちもいて、私は軽い息苦しさを覚えた。

戸張は目立つから、きつと女子からもモテる。

女子の嫉妬は何かと面倒だ。

声が出せないことでそういう世界とは無縁だったのに、やめてほしい。

どうやって撒こうかと考えていると、校門に差しかったところで、いつの間にか戸張が消えていることに気づいた。あきらめて、どこかに行ってくれたみたい。

やつとこのことで肩の力を抜き、校門を抜ける。

門前の桜の木は、ちょうど見頃のように、薄桃色の花々が一面に咲いていた。

ひねくれまくっている私でも、満開の桜を見てきれいだと思う感覚はまだあるみたい。

ありのままの自然はきれいだ。

それはきつと、きれいに見せてやろうという見栄みえも下心もないから。桜の花を見て

いると、陽の光に包まれたみたいに、ギスギスした心が癒えていく。だけで。

「白浜さーん！」

間延びした声が、私の安らぎのひとつときをいとも簡単に壊した。

緑色の自転車を押した戸張が、片手を振りながら私を追いかけてきている。

いなくなったのは自転車置き場まで自転車を取りに行っていたからで、彼はまだ、私に絡むことをあきらめていなかったらしい。

背中を冷や汗が伝う。

追いつかれるものかと速足で門を出たけど、戸張はあつという間に後ろに迫っていた。

「家、どっち？ 僕はこっちなだけどさ」

カラッとした笑顔を向けられ、耐えられなくなった私は、ノートにサラサラと文句を書き殴る。

【いい加減にしてください。迷惑なんです】

「あー、ごめんごめん。じゃあさ、自転車で家まで送らせて？ そしたらもう『歌って』とは言わないから」

何をどうやったら、そういう話になるんだろう？

言っている意味が分からなくて、宇宙人に出くわしたみたいな怖さが込み上げる。他人に変な目で見られることには慣れてるけど、他人を変な目で見るのは久しぶりだ。

ドン引きしている私に気兼ねする様子もなく、戸張は「ねっ」とどこまでも屈託なく笑う。それから裏道に入る路地の前で足を止めると、自転車の後ろの荷台をトンと叩いた。

「ほら、乗ってよ。裏道通れば、ふたり乗りしてもバレないから」

ブンブン頭を振って拒絶したけど、彼は引き下がる様子がない。

「乗ってくれないと明日も『歌って』って言うよ。それに白浜さん、徒歩通学だろ？ 大変じゃない？ 自転車だと楽に帰れると思うんだけどな」

「……！」

戸張の誘い文句に、私はついビクッと反応してしまった。

私にとって、なかなか魅力的なセリフだったからだ。

戸張の言うように、私は徒歩で四十分かけて学校に通っている。炎天下の日も雨の日もひたすら歩き続ける毎日、思った以上に過酷で、どうにかして楽ができないか

とばかり考えていた。

徒歩通学三年目ともなれば、なおさらだ。一回でも楽できるものならしてみたい。

それに、戸張の言うことを聞けば彼がもうつきまとわなくなるのなら、悪くない話だ。

逡巡する私を、戸張はにこやかに見つめている。

【本当に、もう変なこと言わないですか？】

「うん、言わない。『歌って』なんて言わないから」

迷ったあげく、私は半ばやけくそで自転車の荷台に手を置き、戸張にこくりとうなずいてみせた。

「いいってこと？ よしっ」

戸張は白い歯を見せると、サドルにまたがり、「ほら、乗って」と後ろを振り返る。

私は恐る恐る荷台にまたがり、戸張の体に触れないよう、サドルの後ろをつかんだ。

横向きに座った方がいいのかもしれないけど、カッパルみたいだからやめておいた。

私と戸張の関係は間違ってもそんなものではないし、縦向きに座った方が普通に考えてバランスを取りやすい。

「足、そこの出っ張りに置いてね。よし、じゃあ出発〜」

戸張ははしゃいだように言うと、紺色のブレザーの背中を屈め、ペダルを漕ぎ始める。

頬に風を感じたとたん、男子と自転車であたり乗りなんていう、青春ドラマの定番シーンみたいなことをしている自分に寒気がした。

陰キャ中の陰キャなのに、お門違いにもほどがある。

だけでもうあとには引けず、私は顎が喉につくほどうつむいた。誰にも見られませんが、繰り返す心の中で願いが……

片道四十分も歩いて学校に通っているのは、祖母に自転車を買ってほしいと言えないからだ。母を亡くし、父も消えた私を快く引き取ってくれた祖母に、これ以上負担をかけたくない。

バスに乗るのも抵抗がある。同じバスを、この先の女子校に通う中学時代の友達が使っているからだ。

私と彼女は、中二の頃、クラスで一番目立つ女子グループにいた。

移動教室も、合唱部も、休みの日に遊びに行くのも、いつもグループのみんなと一緒にだった。

その頃の私は、言いたいことをハッキリと言うタイプの子だった。

ふたり暮らした父がどこか抜けた人だったから、自然とそういう性格になってしまったんだと思う。

『風ちゃんはズバズバ言うから』

『風、毒舌すぎ。マジこえー』

みんなからはよく、そんなふうに言われていた。

私はハッキリ言うことが正しいと思っていたし、ときには先生に対しても遠慮がなかった。他人からのそういった評価は、褒め言葉のようにすら感じていた。

中二の十一月。

女子グループのひとりが、お母さんと一緒に焼いたというクッキーを学校に持ってきた。だけど私は、きれいにラッピングされたそれを拒絶した。

『ごめん。私、手作りのものって苦手なんだよね』

本当のところは、手作りが苦手というわけではなかった。

私お母さんに、一緒にクッキーを作ってくれるお母さんがいるその子に嫉妬したのだ。私のお母さんは、もうどこにもいないから。

私にはない幸せの中に当然のようにいる彼女が羨ましくて、自分が酷くみじめに

思えた。

彼女は、あからさまに傷ついた顔をしていた。周りにいる同じグループの子たちの表情が強張こわばったのも、すぐに分かった。

浅はかな言動で彼女を傷つけてしまったことに気づいた私は、慌てて謝ろうとした。だげど露骨に避けられ、話しかける機会すら与えられなかった。

それをきっかけに、私は女子グループからハブられた。

クラス中が異変に気づき、誰も私と関わろうとしなくなった。

あつという間に私はひとりになった。

そのときに初めて、ズバズバと本音で接し続けた結果、たくさん敵を作っていたことを知った。クッキー事件なんか、ただのきっかけに過ぎなかったのだ。

それからは、オセロの石を引つくり返すように、すべてがガラリと変わった。

陰口なんてしょっちゅうだった。

グループ決めのときひとりだけ余ってしまったのも、いつものこと。

思い切って父に相談したけど『女子って大変だよ。大丈夫、きつと時間が解決してくれるよ』と取ってつけたような大人目線めくせんでやり過ごされただけだった。

誰にも必要とされない毎日は、苦しくて消えてしまっただけだった。誰かの話し声や

笑い声がザクザクと胸を刺し、全部の景色が色を失って見えた。

やがて唯一の家族だった父にも捨てられ、私はどん底に突き落とされた。私は年のわりにすっかりしていたので、父は『自分がいなくても大丈夫』とでも思ったのだろう。

だから声が出せない今の状況は、実は私にとって都合だった。

みんなとは違う存在そんざいであれば、人に嫌われることも、仲間外れになることもない。それからきつと、捨てられることも……

向こうは関わるのを面倒だと思っているし、私も関わることを望んでいないし、蚊帳やの外の平和な場所にいられる。

だから私は、声を出せない今の自分を、ある意味誇りにすら思っていた。

県庁所在地に近い海に面したこの街は、都会すぎず田舎すぎず、暮らすにはちょうどいい。言い方を換えれば、これといった取り柄がないということだけど。

戸張とぢはペダルを漕こぎ、車がギリギリ通れるくらい細道を進んでいく。

この界隈は昔は宿場町だったらしく、今もその名残があり、ところどころに古びた民宿や旅館が建っていた。たばこ屋や銭湯の看板も残されている。

最近は急速に開発が進み、高層マンションやショッピングモールが次々と建設されているけど、裏通りは昔のままみたい。この街で生まれ育ったのに、裏通りなんて使ったことがないから、物珍しさにきよきよきよしてしまう。

まるで、目まぐるしく変わる世の中から置いてきぼりにされたみたいな場所だった。

「僕、この道好きなんだよね」

立ち漕ぎをしながら、戸張が言う。

「……………」

その気持ちは、なんとなく分かった。

陽気な彼と陰キャの私の気持ちが一致するなんて、おかしいことだけど。

新築の建物はきれいとはいえ、浅くてペロンとしてる。だけど古い建物には、長い年月が育んだ奥深さがあった。私が生まれるずっと前にここで暮らした人々の思いが、今もふわふわとそこら中を漂っているみたいに。

潮の匂いがした。

裏通りを抜けたようだ。

風がザッと吹き、目の前にキラキラ輝く海と白い防波堤が現れる。

上空では、海鳥が優雅に旋回していた。

この場所に繋がるとは、知らなかった。

感心しているうちに、私はハッとした。

祖母の家に近づくどころか、離れてしまっている。

そういえば、戸張に家の場所を言っただけじゃなかった！

慌ててノートを取り出し、戸張に伝えようとしたところで、急に自転車のスピードが速くなった。下り坂に差しかかったようだ。

「……………」

手を離したら自転車から落ちてしまいそうで、私はサドルを持つ手にぎゅっと力を込める。

「シューー！」と子供みたいに擬音語を口にして戸張は、ブレーキを握るつもりがなさそう。戸張の柔らかい髪が風になびき、からかうように私の鼻先をくすぐった。

今すぐに文句を言いたかったけど、あいにく私は声を出せない。彼の背中をドンドンと叩いて抗議したけど、「なに？ 楽しい？」と彼にはまったく通じなかった。

「はい、到着」

防波堤に着き、やっと自転車を止めた戸張に、怒りのメモを突きつける。

【「どこどこ？」 家へ送ってくれるんじゃないの？！】

「その前に、ちょっとした用事があってさ。僕んちそこだから、少し待っててくれな  
い？ お願いだからいなくならないでね、迷子になったら困るから。あとで家まで  
ちゃんと送るから心配しないで」

悪びれた様子もなく戸張は言う、自転車と私をその場に残して、住宅街の方に  
走っていった。

帰り道が分からない私は、とりあえずは彼の言いなりになるしかなかった。

イライラしながら待つこと五分、戻ってきた戸張は、どういうわけか重そうなギ  
ターケースを肩から下げている。

「これ、中古で買ったギター。かっこよくない？」

戸張は自慢げに言う、さっそくギターケースを開けた。出てきたのは、よくある  
雰囲気の色茶色いアコースティックギターだった。

「よっと！」

戸張が、防波堤のブロック塀に飛び乗る。それからあぐらを組んでギターを構える  
と、自転車の横に立ち尽くしている私をじいっと見つめた。

何かを言いたげな彼の視線。

嫌な予感をして、サアツと顔から血の気が引いていく。

【まさか、歌えて言うつもり？ だから無理だから！】

「知ってる、今は心の中でいいから。僕には聴こえるから大丈夫」

彼はどうやら、バカを超えた、本気でヤバイ類たぐの人間のような。

今すぐ逃げ出したい……

そんな衝動に駆られていると、戸張がジャランとギターの弦をかき鳴らした。

夕暮れの茜色あかねいろに染まる海景色に、緩やかなギターの音色が鳴り響く。

それは偶然にも、私の知っている曲だった。

中学のとき合唱部で歌った、とある英語の曲。

合唱部には、仲たがいがいたグループの子たちがいたから、中二の終わりに辞めてし  
まった。歌うことは好きだったが、その頃の私は彼女たちが怖くて、続けようとは  
思わなかった。

耳に染み入る音色に、全身が奮ふるい立つ。

気づけば私は、戸張の言うように、その歌を心の中で歌っていた。

この歌には嫌な思い出しかないから歌いたくなんかないのに、何度も練習したせい  
か、頭が勝手に歌詞を呼び起こす。

強めの海風が、ザアツと吹いた。

桜の花びらが私たちを取り巻いている。  
弥生山やよいぎやまから運ばれてきた、花の嵐だった。

弥生山は近くにある山で、昔は城郭があったらしいけど、今では公園になっている。知る人ぞ知る桜の名所でもあった。

花びらは吹雪のように戸張の周囲を舞ったあと、役目を終えたとばかりに、ひらひらと力なく海に落ちていった。

水面が、薄桃色に染まっている。

潮風と、清々すがすがしい春の香りがした。

戸張はコードが変わるとき、よくきこちなくなつた。何度もミスしては「あ、やべ」と小声でつぶやいている。

このレベルで、よく動画サイトにアップしようと考えたよね……

ある意味感心しているうちに、下手くそなギターは鳴りやんだ。

「どう、どう？」

無邪気に感想を求める戸張。

【それで、動画サイトに投稿しようとしたの？ すごい度胸】

「あれ、下手だった？ でもほら、歌があるとギターの下手さが誤魔化ごまかせるって言わ

ない？ 僕歌下手だから、代わりに歌ってくれる人探してるんだよね。それで今、白浜さんを熱心にスカウトしてるわけ」

【私に声をかけるあり得ない神経は置いておくにしても、その下手さなら、歌があつても誤魔化ごまかせないとと思うよ】

「うわっ、白浜さん意外と毒舌。いや、毒筆どくひつって言った方がいいのかな？ あ、うまい言い方でしょ」

ニコニコしながら謎の自画自賛をしている彼に、白けた目を向ける。

「でも、今日はいつもよりうまく弾けたな。やっぱり白浜さんが歌ってくれたからだよ」

【私、立ってただけだけど】

「白浜さんの心の中の歌声、僕にはちゃんと聴こえてた。嘘くさいって思うかもしれないけど、本当だよ。ほら、世の中の常識が正しいとは限らないじゃん？ だって常識は、人間が勝手に決めたものなんだから」

【ねえ、大丈夫？ そんな変人で友達とうまくやってるの？】

「あはは、白浜さんに言われたくはないな」

まあ、それはそうだけど。

クラスのはみ出し者の私に、人気者の彼が友達事情を心配されたくはないだろう。嫌みともとれる発言だったけど、私は別に嫌な気分にはならなかった。戸張はあまりにもあつげらんとしてゐるから、悪意を感じないのだ。変な人だけど、きつと悪い人じゃない。だけど、これ以上は関わりたくない。

その後、戸張は約束どおり私を家まで送ってくれた。

ブンブンと手を振りながらも来た道を自転車であつていく戸張を、最後まで見送ることなく家に入る。

変なのに絡まれたな……

住み慣れた祖母の家の匂いに包まれたとたん、どつと疲れが押し寄せた。

こんな日はもう、二度とごめん。

戸張は自転車で私を送る代わりに、もうしつこくしないと約束したのだから、大丈夫だと信じた。

きちんとローファーを揃え、玄関から上がる。

すぐに、台所に立つあずき色の割烹着かつぽうぎの背中を見つけた。

「おかえりなさい」

物音に気づいた祖母が、こちらを振り返る。

「今日は遅かったわね。洗濯もの入れておいたから、畳んでおいてくれる？」

それから祖母は私の顔をまじまじと見つめ、にこやかな笑みを浮かべた。

「風ちゃん、今日はなんだか楽しそうだけど、いいことあった？」

「……………」

私は無言でかぶりを振ると、台所の前を通り過ぎた。

リビングとして使っている十畳間で、洗濯ものを畳み始める。

半開きの縁側の引き戸から、夕方の風がそよいでいた。

窓越しに見える、庭の樹木や小さな池、石灯籠いしとうろう。祖父がこだわって設計したらしい、

小さいながらもなかなか豪華な庭だった。

祖父は、私が生まれる前に亡くなっている。

壁には年季の入った四角い壁掛け時計がかかっている、その隣には私の写真が飾られていた。中二の十月、合唱コンクールの会場前で、友達と撮影したものだ。見たくないから外してほしいのに、祖母には伝えられずにいる。

部屋の隅にある仏壇には、母の遺影が置かれていた。

記憶の中よりも若い母の笑顔は、いったい誰に向けられたものなんだろう？ 私といるとき、彼女はいつも母親の顔をしていた。そんな母は、小四のとき、なんの前触れもなく亡くなった。そして、父も私を置いて消えてしまった。

—— 風ちゃん、今日はなんだか楽しそうだけど、いいことあった？

洗濯ものを全部畳み終えたところで、祖母のセリフを思い出す。さっきからずっと、胸の奥に引っかかってモヤモヤしていた。

どうして祖母は、あんなことを言ったんだろう？

変なクラスメイトに強引に連れ回されて、いつもの何倍も嫌な気分のはずなのに。

この私が誰かとして、楽しいと感じるわけがない。

そんな感情は、声とともに、遠い過去に置きざりにしてきたのだから。

「おーい、白浜さん。練習に行こう」

翌日の放課後。

門に向かって歩いているとそんな声がして、背筋がゾゾツとした。

そうつと振り返ると、今日も無邪気の塊かたまりみたいな笑みを浮かべた戸張が立っている。『はあ？』と出ないはずの声が漏れかけた。

私はどうにか気持ち落ち着かせると、ノートとペンを取り出し、文字を書き殴る。

【昨日の約束、覚えてます？】

「覚えてるよ。『歌って』って言わないっていう約束ね。僕、『歌って』とは言ってないよ。『練習行こう』って言ってるだけ」

子供みたいにキラキラした目で言われ、そうきたか、と私は凍りついた。

こういうとんち勝負、子供の頃に昔話で読んだことがある。とんちっていうか、もはや屁理屈だけだ。

【同じことだと思っただけですけど】

【同じじゃないよ。全然違う】

【とにかくもう構わないで、苦手だから】

【苦手って、僕がってこと？ うわつ、きついなー】

へらへらと笑う戸張は、どこまでが本気でどこまでが冗談なのか分かりにくい。

ああ、やっぱり戸張には話が通用しない。

私はひたすら彼を無視して、速足で帰ることにした。それでも戸張はしつこく追

かけてきたけど、気づくと途中でいなくなっていた。

あきらめてくれたみたい。

静寂が戻ってホッとしつつも、ずっと響いていた戸張の声が消えて、落ち着かない気分になる。私ひとりの、異様なまでの静けさを思い知らされた。

ずっと楽しそうに喋しゃべっている戸張の世界は、すごく生き生きしている。

ひと言も喋しゃべらない私の世界は、死んでいるみたいだ。

正反対の私と戸張の世界は、やっぱりどう考えても、混じり合うわけがない。

翌日の放課後も、そのさらに翌日も、戸張は私につきまといてきた。

そのうち『練習しよう』とも言わなくなり、もはやただのストーカーだ。

人気者の陽キャ男子と、声の出せない陰キャ女子。

あり得ない組み合わせは自然と注目を浴び、いつもどこからか視線を感じた。

存在すら忘れられるほど、ひっそりと残りの高校生活を送る計画だったのに、戸張のせいで台無しだ。

私はずっと戸張を無視していた。

だけどある日の放課後、ついに堪忍袋の緒が切れた。

自転車を押しながら呑のん気な足取りで後ろを追いかけてくる戸張に、バシッとノートを突きつける。

【毎日暇なの？ 部活してないの？ 塾は？】

「お、久々に話しかけてくれた！ 部活は入っていないよ、塾も行っていない。僕、バカだから受験しないんだ」

つつけんどんな態度にもかかわらず、戸張はまるで尻尾しっぽを振る犬みたいな勢いで答える。

【バカなのは知ってる】

「相変わらず、きつついなあ。白浜さんって喋しゃべらないから、余計に言葉が刺さるよね」

ははは、と戸張が笑った。

「白浜さんは？ 僕と同じで毎日家に直帰してるけど、塾行っていないの？」

【そんな難しいところ目指してないから、自分で勉強してる】

「へえ、すごいね」

間延びした口調で答えたあとで、いつの間にか真横に並んでいた戸張が、じっと私

の顔を見に来る。猫に似た茶色の瞳をすごく近くに感じて、不覚にもドキリとした。

「ねえ、ちょっと見ていい？」

距離感の近さに戸惑っているうちに、ノートをひよいと取り上げられてしまう。

「……っ！」

返してと言いたかったけど、もちろん声は出せない。

仕方なく抗議の意味を込めて戸張の制服の裾を強く引つ張ったけど、彼は気にすることなくノートをパラパラと捲っている。

「なにに、【おばあちゃんは休んでて。洗い物は私がするから】か」

感心したように戸張が言う。

昨夜の祖母との会話を読まれたみたい。

デリカシーのないやつだとは思っていたけど、これほどとは思わなかった。

本当にサイテーだ。

顔が熱くなるのを感じながら、なんとしてでもノートを奪い返そうと手を伸ばす。だけど戸張は高身長を利用して、ますますノートを高く掲げた。頑張っても私には手が届かない位置で、ノートを捲り続ける。

「ふうん、白浜さんはいいつも、おばあちゃんのことを気遣ってるんだね。優しい

なあ」

私はますます恥ずかしくなって、ぎゅっと唇を噛んだ。早くノートを取り返して、

【ほんとサイテー！ 人間のクズ！】と書き殴りたい。

「で、これは昨日の僕との会話だね。うわ、辛らつだな」

【バカ、うざい、来ないで！】

そんな乱れた文字を見て、戸張が苦笑した。

改めて考えると、たしかに酷い言葉の数々だ。だけど、わけの分からない理由でしつこく絡んでくる彼が悪いのだ。

ピョンピョンとひたすら跳ね、やつとの思いで戸張の手からノートを取り返した。

ひと安心している私を、戸張はうれしそうに眺めている。

からかっているわけじゃない、純粹に幸せそうな顔。

なにがそんなにうれしいのか、さっぱり分からない。

腹は立つけど、戸張があんまりうれしそうだから、ノートに文句を書く気が失せてしまった。

私は戸惑いつつ、ふいっと戸張から視線を逸らす。

すると、視線の先に見馴れた後ろ姿を見つけた。

灰色のショートカットに、紫のニットカーディガン。パンパンに中身の詰まった白いビニール袋を両手から提げたその人は、祖母だった。

スーパードで買い物をしてきた帰りみたい。腰痛持ちなのに、あんな重い荷物を持って大丈夫なわけがない。『私が行くから無理しないで』っていつも伝えているのに、聞く耳を持ってくれないのだ。

すぐに駆け寄って手伝ってあげたかったけど、今は戸張と一緒だ。

男子と歩いているところを祖母に見られるのは恥ずかしい。

「あの人、白浜さんのおばあちゃん？」

困惑していると、戸張が言った。ぎよつとして彼を見る。

「さっき、白浜さんの口が、おばあちゃんって動いてたよ」

戸張はおもしろがるように言うのと、速足で自転車を押し、あつという間に祖母に追いついてしまった。

「白浜さんのおばあさんですよね？ よかったら、荷物持ちますよ」

なんの抵抗もなく初対面の相手に話しかけることのできる戸張は、やっぱり自分とは異なる種類の人間なんだとしみじみとする。

祖母は驚いたように戸張を見上げ、後ろにいる私に気づき、また戸張を見た。

「あら。もしかして、風ちゃんのお友達？」

戸張はにこつと、いつもの人好きのする笑みを浮かべる。

「はい。風さんと同じクラスの戸張って言います」

「まあ、それはありがたいわ。じゃあお言葉に甘えようかしらね」

祖母は見たこともないほどうれしそうな顔で、戸張に買い物袋を渡す。

「重いっすね、大変だったでしょ？」

戸張は軽い口調で言いながら、ビニール袋を自転車のカゴに入れた。もうひとつの袋はハンドルにかけて歩き出す。

私を置いてけぼりにして、ふたりは並んで歩き始めた。ペラペラとひたすら話しかけてくる戸張に、祖母は早くも気を許したようだ。

たしかに戸張には、誰でも打ち解けやすい不思議なオーラがある。

それに、かわいい系の部類に入る顔だから、祖母のツボに入ったのだろう。祖母が密かにとある男性アイドルグループを推していることは、前から知っていた。

そんなふたりを眺めているうちに、祖母に男の子といるところを見られた恥ずかしさは消えていた。

戸張は家の前に自転車を止め、玄関まで買い物袋を運んでくれた。

「ありがとう戸張くん、助かったわ。よかったら上がっていかない？ 今朝お隣さんから、旅行のお土産のお饅頭をいただいたのよ。どうかしら？」

「本当ですか？ 僕、饅頭大好きなんです。じゃあ、お言葉に甘えてお邪魔しませう」

戸張は、祖母の誘いに遠慮することなく応じた。それからスニーカーを脱ぐときちんと揃え、ウキウキした様子で祖母の背中を追う。

「さ、座って。すぐにお饅頭を用意するからね」

「なにかお手伝いできることありますか？」

コタツ机の前に座った戸張が、十畳間を出ていこうとしている祖母に声をかける。「いいのよ、ゆっくりしてて」

祖母は戸張の行儀のよさにご満悦のようだ。

私は仕方なく戸張の向かいに座り、彼のコミュ力の高さに感心していた。

見馴れた十畳間に戸張がいる光景は、違和感しかない。

「この家、すごい落ち着く。ばあちゃんちみたい」

【私のおばあちゃんちだよ】

「あはは、そういえばそうだね。僕のばあちゃんち、遠いからあまり行けないんだ。

だから白浜さんが羨ましいよ」

少しすると、祖母がカルピスとお饅頭をお盆に載せて戻ってきた。

「あ、この饅頭見たことある。京都のですよね」

「まあ、よく知ってるわね。お隣さん、京都に旅行に行かれてみたいなの」

「この前テレビで紹介されてるの見たんです。江戸時代からあるらしいですよ、この饅頭」

「まあ、そうなの？ さすが京都ね」

初めて会ったとは思えないほど、戸張と祖母の会話は弾んでいる。

私はカルピスをストローで啜りながら、じつとふたりを観察していた。

こんなに楽しそうな祖母を見るのは久しぶりだ。娘を亡くし、孫が声を失ってから、笑っていてもどこか寂しげだったのに。

「風ちゃんがね、お友達と一緒にいるところを初めて見たから、すごくうれしかったのよ。ほら、この子喋れないでしょ？」

「ただその話を持ち出したとたん、祖母は表情を曇らせた。

「本当はね、とつてもきれいな声なのよ。歌うことが大好きで、中学校のときは合唱部でソロパートを任されるほどだったの」

祖母が、壁にかけられた額縁に目をやる。

中二の十月、合唱コンクールの帰り。今は顔すら見たくない友達数人と撮影した、私の大嫌いな写真。

あのときまだ一緒に暮らしていなかった祖母は、わざわざ遠くの会場まで見に来てくれたのだ。そして、私がソロパートを担当したことをすごく喜んでくれた。

輝かしい過去を思い出し、胸の奥がチクリとする。

「そうなんですネ。それは聴いてみたいな」

戸張がボソツと言った。

いつもとはどこか違う声だった。

写真を見上げる彼の横顔も、妙に真面目だ。

ひよっとしたら、声が出せなくなった私を、今さら憐れんてるのかもしれない。

歌うことが大好きだったのに、歌えなくなったわけだから……

変人戸張にも、ちゃんと同情心があつたらしい。

やるせない気持ちになったけど、彼が声の出ない私を憐れんでくれるのは本望だ。

これでもう、今までのようにしつこくはしなくなるだろうから。

今後は他のクラスメイト同様、一線を引いて私と接してほしい。

それから祖母と戸張は、私そつちのけですつと会話をしていた。

七十歳を過ぎている祖母と、喋れない私がふたりで住んでいるこの家は、いつもは時計の針の音がやたらと耳につくくらい静かだ。

だけど戸張がいる今は、違う家みたいに騒々しかった。

戸張は、存在そのものが賑やかなのだ。

澆刺はらうとしてゐる祖母を眺めていると、だんだん私の気分も和んでいく。

窓の外がすっかり暗くなってから、戸張はやつと帰ると言い出した。

門の前まで戸張を見送りに出たところで、私はポケットからノートを取り出すと、

街灯の明かりを頼りに文字を書いた。

【今日ありがとう。おばあちゃん、喜んでたみたい】

無理やりついでにこれでお礼を言うなんて変だけど、祖母の楽しそうな姿が見られたのは感謝したい。

のんびりと老後を送っていた祖母のもとに転がり込むような形で居候いさぐらうしている私は、いつも罪悪感でいっぱいだから。祖母は、父のことも私のことも絶対に悪く言わない人なので、なおさらだった。

街灯の薄明かりの下で、戸張は照れたように頭の後ろを掻いた。

「白浜さんにお礼言われたの初めてだから、照れるな。だっていつも、ウザイとかバカしか言われてないからさ。あ、そうだ」

戸張が、何かが閃いたようにニツと笑う。

「お礼に、今度は僕の用事に付き合っつてよ。ひとりで行きたくても行けなかったところがあつてさ。白浜さんが一緒なら行けると思うんだ」

相変わらずの脈絡のない話の流れに、『は？』と出ないはずの声がまた漏れかけた。そうだった、彼はこういう人だった。

いいところもあるけど、基本は常識がなくて凶太いのだ。

【そんなこと、私がする義理はないよ。それとこれとは話は別】

暗がりでも読み取れるよう、大きめの文字を書く。

戸張は首を傾げ、「そっかあ」と残念そうな顔をした。

「じゃあ、白浜さんのおばあちゃんに言おつか。白浜さんが本当は喋れること」

——え？

頭の中が真っ白になった。

不意打ちでパンチをくらったような感覚。

居心地のいい私の静寂の世界が、終わってしまう恐怖に襲われる。

吐息が震える。息苦しさを覚えた。

……だけど、ここで引き下がるわけにはいかない。

バクバク鳴る心臓の音を感じながら、できるだけ平静を装って、ノートにペンを走らせる。

【何言ってるの？いくら戸張くんでも、そういうでたらめ言うのよくないと思う】

怒り顔でノートを突きつけると、戸張は不満そうに眉根を寄せた。

納得のいつていない雰囲気だけど、このまま押し切るしかない。

どうすれば、この危機を切り抜けられるだろう？

焦りながらも必死に考えを巡らせていると、軽い衝撃とともに、視界が暗転した。

ノートとペンが手から離れ、鈍い音をたてて地面に落下する。

体全体が、自分のものとは違うぬくもりに包まれていた。

ドクドクという鼓動を肩の上辺りに感じたけど、私の心臓はそんなところがない。

戸張が私を抱きしめたのだとハッキリ分かるまで、数秒かかった。

「ぎゃっ！」

反射的に、喉から悲鳴が飛び出す。

私は精いっぱい力を込めて戸張を突き放した。

他人に抱きしめられる違和感から解放され、ホッと息をついたのも束の間、自分のやらかしに気づく。

悲鳴を上げたばかりの口元を、震えながら押さえた。

——やってしまった。

恐る恐る戸張を見ると、彼はこのうえないほどしたたかにほほ笑んでいた。

「白浜さんの声が聞けてうれしいよ」

もう、誤魔化しようがない。

私は腹をくくると、どうにか息を整えて口を動かす。

「……どうして知ってるの？」

家の中にいる祖母に聞こえないよう、気をつけて声を出した。

久々に人前で出した声は、ガサガサで、まるで知らない人の声みいだった。

「前に聞いたんだ。白浜さんが、独り言喋ってるの」

「独り言？ いつ？」

私は、いつも気を抜かなかった。

学校でも、家でも、何があっても声を出さないように徹底して生活していたはずなのに。戸張の話は、簡単には信じられない。

「それはひみつ」

「……………」

悔しくてどうにかなりそう。

声を出さないことに全力を注いでいた私でも、さすがに抱きしめられたのは予想外だった。

戸張はこんなでも一応男だし、付き合うどころか人を好きになったことすらない私は、男子に免疫がないのだ。

よりにもよって戸張にバレるなんて、考えもしなかった。完璧に油断していた。返す言葉が見当たらない……

「で、僕の用事に付き合ってくれるよね、白浜さん？」

呆然としている私に、戸張が無邪気に聞いてくる。

戸張は、私が本当は喋れることを誰にも知られたくないと、分かっている。祖母に罪悪感を抱えていることにも、気づいているんじゃないだろうか。

つまり、これは脅迫だ。

「ただ、祖母にはどうしても黙っておいてもらいたくて……。  
私はしぶしぶうなずくしかなかった。」

立ち読みサンプル  
はここまで

秘密